

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その18）

～「ミニバスケットボールの今昔 ⑥」～

2020年5月吉日

広島県バスケットボール協会U12部会

スーパーバイザー 大庭浩資

#### 14 チーム移動

今でこそ、ほぼすべてのチームが、選手や荷物の移動は、自家用車でを行っています。これもごく当たり前のことですね。

でも私が初めてコーチをしたチームの移動は、そうではありませんでした。

実は私一人の引率のもと、選手はバスや市内電車を乗り継いで試合会場に移動していました。自分の学校へ集合して、自分の荷物に加えて、ボール3個入りのケースを5～6ケース、さらに救急箱などを手分けして持ち、自分の学校を出発して会場の学校へ行き、また自分の学校へ帰ってそれから解散という具合です。

朝早くからの集合。試合でもへとへと、移動でもへとへと。そして夜遅くの解散。すべてが終わって学校の門を出る時は、みんなぐったりでしたが、それはそれでとても楽しい時間でもありました。歩いている時はみんなでいろいろな話もできましたし、バスや電車の中でマナーも身に付きました。そして何より、一緒に苦労しながら移動することで、チームワークが高まったと思います。

引率と言えば、庚午ミニバスの時に、福山ローズボールカップへ、私一人で男子部員13名を連れて参加したことがありました。1泊2日でしたが、学校へ集合した後、広島から新幹線で福山まで行き試合をしてホテルに泊まる。そして翌日、また試合をして広島に戻り学校で解散。まるで修学旅行の延長ですが、とても楽しい2日間でした。

選手をコーチだけで大会に引率して宿泊して帰る。こんなこと今では絶対にありえませんよね。でも当時は何の心配もなかったことは、今でもはっきり覚えています。それだけその時の13人はともしっかりしていました。

#### 15 テレビ放送があった？

昔も今も、小学生のバレーボールやサッカーの試合のテレビ放送がありますね。それなのに、バスケットボールの放送がないのはどうしてでしょうか？

一昔前の、ミニバスがそんなに盛んではなかった頃なら納得できますが、今は競技人口が多いバスケットボールですから、テレビ放送があってもよさそうですね。

実は、昔2年間だけ、テレビ放送があったのをご存知でしょうか？ 某お味噌会社がスポンサーになり、全国大会予選の決勝戦がテレビ放送されました。

なぜそのことを覚えているかということ、私は運よく(?)、2年連続でテレビに映ったからです。(笑い)

1年目(1989年)は男子決勝の審判で、2年目(1990年)は男女のコーチとして、しっかりテレビに映りました。

1年目の決勝戦の試合は、初めてのテレビ放映ということで、役員も指導者もみんな緊張気味でした。お客さんは集まるのだろうか？ ハプニングは起きないだろうか？

でもさすがにテレビ局の方はすごいですね。私たちの心配をよそに、どんどん進行を進められ、後日放映されたものを見ると、それなりに立派な大会となっていました。

ただ、タイマーをしていた役員が、試合終了間際にタイマーを止めるのを忘れ、試合は止まっているのに、試合終了のブザーがなるというハプニングを、カメラはしっかりと捉えていました。こうしてみると、TOは大人より選手の方が上手ですね。(笑い)

ちなみにこの時優勝した、男子の五日市観音チームは、全国大気でも優勝しました。

2年目は、役員も指導者も少しは慣れたのか、あまり緊張はありませんでした。私はその大会では、庚午ミニバスの男女のベンチに入っていましたら、両方の決勝戦でテレビに映るという幸運でした。また試合も男女ともに庚午ミニバスが優勝し、全国大会へのアベック出場を決めた年ですから、絶対に忘れられません。

そして、その後もテレビ放送が続くものと思っていましたが、残念ながらスポンサーがつかず、結局この2回で終わり、現在に至っています。

しかし、ミニバスのチーム数も飛躍的に増え、またドラゴンフライズも1部昇格を決めるなど、広島県のバスケットボールに対する関心が大きい今なら、みんなの努力次第でテレビ放映をしていただけるのではないかと、大きな期待をしているところです。

## **1.6 全関西ミニバス交歓大会**

毎年、夏の恒例行事になっているのが全関西ミニバスケットボール交歓大会です。多くのチームが全国大会よりも、まずは全関西に出場することを目指しているのではないのでしょうか。

この全関西は、私がミニバスの指導を始めたころは、すでに立派な大会として位置づいていました。前述したように、以前の広島県立体育館やスポーツセンターを中心に、市内各小中学校の体育館を使用しての分散開催でしたが、広島チームにとっても、また県外のチームも一つの大きな目標でした。そしてそれは今でも変わりません。

しかし、一昔前の全関西は、多くの苦労があったと先輩方から聞きました。このご苦労については、一言で語ることはできません。ですから私の話はほんの一部だけです。

まず、大会そのものですが、これは金子名誉会長が、「広島チームの技術力の底上げを図りたい。そのためには、手本となるチームを広島に呼んで大会を行うことで、その技術を、広島選手に肌で感じさせたい」という強い思いから話がスタートしたそうです。

でも、当時の広島は、チーム数は少なく、また指導者も多くありません。金子先生は自ら、まずは中国地方のいろいろなチームのところへ赴き、大会参加への呼びかけを行われたそうです。さらに四国のチームや九州のチームにも足を運ばれ、呼びかけを行われました。

今でこそ、車もありますし、交通機関も充実していますが、当時はそうではありません。金子先生は、いったいどうやって各地に足を運ばれたのでしょうか？ これについては私もあまり話を聞いたことはありませんので、こんどぜひお聞きしてみたいと思います。

さて、参加チーム数はある程度そろったものの、今度は運営資金がありません。わずかな大会参加費を会場費に充て、あとはまさに手弁当での運営だったそうです。

金子先生の強い思いと当時の指導者の方々の努力で、だんだんと参加チームも増えていき、県によっては、全関西のための予選を行うところも出てきました。それだけ全関西という大会が、関西地方では注目されるようになってきたのですね。

またその後、広島チームの保護者の理解も深まることで、パンフレットに載せる広告を集めていただけるようになり、その広告代が大会運営資金に充てられるようになりました。それにより、グリーンアリーナという立派な会場を使用できるようになり、選手にとっても指導者にとっても、また保護者にとっても夢のある大会となったのです。

もともと広島選手の技術向上を目的に始まった全関西ですが、選手よりもむしろ我々指導者がコーチング技術を学んだり、審判技術を学んだりする場になっています。

新型コロナウイルスの感染防止のため、本年度の全関西ミニバスケットボール交歓大会は中止となりましたが、来年度以降も、夢のあるすばらしい大会であり続けてほしいと願うばかりです。

完

以上で、「ミニバスケットボールの今昔」は終了です。拙い話にもかかわらず、お読みいただいた皆様、本当にありがとうございました。

ここに載せた内容以外にも、まだまだたくさんの思い出話があることと思います。ぜひ私の所か、広島地区事務局へ情報提供してください。どうぞよろしく願いいたします。